

「神のあわれみによる勧め」

ローマ12章1節－2節

それが日本であっても、アメリカであっても、どこの国であっても多くの人たちは「教育」に関心を寄せます。特に若者達がどんな教育を受けるかということは、その国の将来に関わってきます。教育はすぐに芽が出るものではありませんが、確かに私達が培ったものが私達の社会や国の形成にも大きな影響を与えます。

この「教育」ということについて1987年、ハーバード大学において、大学レベルの教育に携わる者達の会議が持たれました。その時にコネール大学のフランク・ローズ学長が教育改革案を提案しました。彼は聴衆に向かいこう言いました。

「「価値観」や学生達の「健全な道徳」という面に大学はもっと注意を払う時がきている」

すると、ただちに聴衆はざわつき始め、批判がわき起こったといえます。そんな中、一人の学生が立ち上がって言いました「あなたは誰の価値観を教えるというのですか。誰がそれを教えるのですか」。聴衆は彼の発言に対して盛んな拍手を送りました。この質問に対してローズ学長は何も答えることなく席に戻りました。

なぜ、聴衆はざわついたのでしょうか。なぜなら、私達にとって「価値観」というものは「各自のもの」であり、その価値観に基づいて、「このことはしなければならぬ、このことはしてはならない」というような道徳も一人一人が決めるべきものと彼らは考えたからです。ですから、彼らは価値観とか道徳について人からとやかく言われたくなかったのです。自分の好きなように生きていきたいのです。なぜなら、それこそが私達が今日「自由」と呼んでいることなのですから。

この会議が持たれたのが1987年ですから、今から31年前のことです。以来、この価値観と道徳に関する見方は変わらないばかりか、さらにこの考え方は多くの人たちに支持され、世界に広がっています。

そして、これは実は新しいものではなく古の時代から既に人の心にあったものなのです。旧約聖書の士師記に記されているとおりです。「めいめいが自分の目に正しいと見えることを行っていた」（士師21章25節）。このような生き方がどんな世界を作り出すかということは既にこの士師記に記されています。そうです、士師

記の時代は聖書の中でも特に混乱に満ちた時代でした。このようなことを心にとめ、今日もローマ書12章のあのご言葉を見ていきましょう。

「兄弟たちよ。そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧める。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物として捧げなさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である。あなたがたは、この世と妥協してはならない。むしろ、心を新たにすることによって、造りかえられ、何が神の御旨であるか、何が善であって、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知るべきである」（ローマ書12章1節－2節）

皆さん、私達はローズ学長の勧めの言葉と、ここでパウロが書いている勧めの言葉を見ています。これらの二つの言葉には違いがあることに気がつきましたか。

ローズ学長は自分の考えを勧めました。教育者としてその考えは自分の経験に基づいたものだったのでしょうから、いい加減なものではなかったと思います。しかし、ローズ学長が「こうでなくてはならないでしょう」と自分の考えを勧めたら、聴衆は「NO」と答えたのです。「ほっとけ、誰が俺達に道徳と価値観を教えることができるのか」と。そしてローズ学長はこの反論に答えることができませんでした。なぜでしょうか。考えてみました。なぜなら「彼も聴衆と同じ人間だからです」。「俺達と同じ人間が俺達に価値観を押しつけるのか。善悪を教えるのか」と言われれば、応える言葉はないのです。

それに対してパウロは「神のあわれみによって」勧めました。これがローズ学長の勧めとパウロの勧めとの違いです。この違いには天と地の差があります。彼の勧めは「自分の考え」ではなく「神のあわれみ」によってなされたものだからです。

もちろん私達はたとえそれが「神にあって」なされた勧めであっても、その勧めを無視することができますし、それに反論したり、拒絶することができることを私達は知っています。

私達日本人はあの第二次世大戦で「神」ということについて、負の遺産を持っています。その時に「天皇は神である」ということから「天皇は人間であった」という価値観が一日の内に全くひっくり返る経験をしていますから、「神」という言葉に対して強い警戒心があります。

以来、神は真剣にとらえるものではなくて、あまり深入りしないほうがいいという心理があります。何人もの人から聞いたことがあります。「最近、教会に行っているの」と親に打ち明けたら、「ためになる教えもあるだろうけれど、あまり深入りはするな」と言われたと。かといって私達は神の存在を人生から全く排除することもできずに（内心、恐れがありますから）、困った時の神頼み、必要な時の神頼み、一応、年に数回、義理を果たして、お参りしたりします。

ほどほどに義理を果たさなければならないという程度の神ならば、その言葉に従うことはありませんでしょう。それよりも自分で好きなように生きていって、苦しい時にだけ「頼みますよ」と言っていたほうが気楽でありましょう。気楽であるということは、私達が思う以上に私達がとても大切にしていることなのです。

しかし、神の存在を疑いなく信じている者にとりましては、神のあわれみにより我々に強く勧められている言葉は聞き捨てることができないものとなります。その言葉は時代が変わっても決して変わるものではなく、それに従うことには大きな意味があるからです。そして、その勧めの言葉にこそ人として生きる最善の生き方があると私達は信じるからです。

私達には自分の側で都合よく作り出したものではない、すなわちあちらから（天から）与えられている変わることもない価値観が必要です。「何でもあり」という世の中で、私達が本当に必要なものはこのような確固たるものなのです。

今日、私達はよく「モチベーション」という言葉を聞きます。日本語で言うところの「動機」といいますか、人を動かす源の力となるものです。よくスポーツ選手が現役を引退する時に使います。「モチベーションがなくなっていましたから引退します」。

この度のオリンピックのような大きな大会が終わりますと、このようなことで思い悩む選手は多いのではないかと思います。四年間、ひたすらオリンピックだけを目指してがんばってきたけど、それも終わってしまった。さあ、これからどうするのか。もう一度、四年後のオリンピックを目指すのか、その時に自分を奮い立たせるものがなければ、これからの四年間、苦しい練習に向きあうていくことは難しくなります。モチベーションがないからです。

高校生が一生懸命、勉強することの一つの動機は自分が望んでいる大学に行くということです。あと10キロ痩せようと思っている方は、そうすればあの服を着るこ

とができるという動機があるのです。野球選手から受験生、ダイエットを試みるものまで、私達は動機に突き動かされています。

皆さん、今日の箇所をもう一度、読んでみましょう。。すなわちパウロは私達にこのような勧めをしているのです。「兄弟たちよ。そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧める。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である。あなたがたは、この世と妥協してはならない。むしろ、心を新たにすることによって、造りかえられ、何が神の御旨であるか、何が善であって、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知るべきである」。

これらの勧めを義務として受け入れるのであるのなら、私達は長続きをしませんでしょう。しかし、この言葉には私達を動機づけるものがあります。それが「神の私達に対するあわれみ」なのです。

実際に私達がクリスチャンとして生きる時に、神の教えに従うことを突き動かしているものは何でしょうか。クリスチャンであるから神は諸々の災いから守ってくれるであろうと思われるからでしょうか。自分の夢の実現や目標達成のために神は力をくれるからでしょうか。

これらを動機にするならば、その人は必ず行き詰まる時がきます。クリスチャンであっても思いがけないことは当然、起こるからです。全ての目標が達成されるとは限りませんし、かたちだけの信仰であるならそこには常に義務感が伴うものです。

そうではなくてパウロがまず言ったことは「神のあわれみ」なのです。「神のあわれみ」とは別の言い方をすれば「神の恵み」ということです。聖書の中に記されている人々がなぜ神に喜んで仕えていったのか。それは神の恵みを彼らが知ったからです。それが彼らの動機となったのです。信仰とは「ねばならない」ものではありません。「せずにはいられないもの」なのであります。

あのパウロというキリストの使徒は1テモテ1章13節—16節でこうっています。

「わたしは以前には、神をそしる者、迫害する者、不遜な者であった。しかし私は、これらの事を、信仰がなかった時、無知なためにしたのだから、あわれみをこうむったのである。その上、私達の主の恵みが、キリスト・イエスにある信仰と愛とに

伴い、ますます増し加わってきた。キリスト・イエスは罪人を救うためにこの世に来てくださった」という言葉は、確実でそのまま受け入れるに足るものである。わたしは、その罪人の頭なのである。しかし、私があわれみをこうむったのは、キリスト・イエスが、まず私に対して限りない寛容を示し、そして、わたしが今後、彼を信じて永遠の命を受ける者の模範となるためである」（1テモテ1章13節—16節）。

彼はかつてはキリスト教徒を捕えては殺害しているような人間だったのです。ですから、彼に弁解の余地はないのです。しかし、神は限りないあわれみを自分にかけて下さった。まさしくキリストは罪人を救うためにこの世界に来てくださったのだ。そして、その罪人の中でも自分は頭なのだ。パウロはこの自分にかけてられたあわれみをよく知っていました。

彼は「限りない寛容」を神が自分に示して下さったとも言っています。そうだろうな、キリスト教徒を迫害していた男なのだから、まさしく限りない寛容が彼には示されていたのだなと私達は他人事で考えます。

しかし、ひとたび、自分の心に手を置いて思いめぐらせば、パウロだけではない、自分にも限りない神の寛容が示されていることが分かる。いったいどれだけの年月、私達は神に背を向けて生きてきているのか。都合のいい時、必要な時だけ神を持ち出してきて、用が済めば端っこに置きっぱなしにしているような日々を送っているのが私達です。同じことを伴侶にすれば、そっぽを向かれるでしょう。でも、神はそんな私達を見捨てずに、今日も私達を生かし、日毎の糧を与え、そして、神と共に歩む人生、そんな機会を今も私達に与えてくださっているお方なのです。私達もパウロと何ら変わらない限りない神の寛容の中に今、私達はいるのです。

そして、その神の自分に対する寛容とあわれみを知れば知るほど、心の中からその神のために生きようという思いがパウロの心の中にもわいてきたのです。その私と全く同じあわれみを、あなた方も受けている。であるから、あなたの体を生きた供え物として神に捧げなさい。それは、義務ではなく、神の恵みに対する当然の応答（レスポンス）であるとパウロは言うのです。

以前、「Amazing Grace」という映画を観ました。その映画の中ではウィリアム・ウィルバーフォースという若き法律家が奴隷船貿易の反対を掲げて立ち上がります。そして、同時代に生きた Amazing Grace の作者ジョン・ニュートンも映画の中で彼にアドバイスを与えているのです。

ニュートンは映画の中で、高齢ゆえに目が見えなくなりながらも、衰えて記憶が定かでなくなる前に、自分のしてきたことがどんなことであったかを証言するために、自分の経験を語り、それを書き取らせている場面がありました。彼が経験したことは何だったのでしょか。ニュートンについて書かれている資料を見ます時にこんな記述があります。

英国人ジョーン・ニュートンは若くして海の男となり、アフリカに渡る。後に彼が自叙伝に書いているように、その理由は「思う存分、罪を犯す」ためであった。その道は下り坂、彼は落ちに落ちていった。そして、アフリカの地で彼がしたことは、アフリカから新世界へと奴隷を運ぶ奴隷船の船長。「思う存分、罪を犯す」という心意気で生きていた彼は当然、「奴隷を運ぶ」以外に、諸々のことをしてきたことは容易に想像できます。

その彼の乗っていた船が北大西洋で大嵐に会い、沈没しそうになりました。船体は壊れ、海水が流入し、嵐はおさまらず来る日も来る日も彼らは海水をくみ出しました。このままいけば、船は沈み、自分も沈み、溺れ死ぬことは確実でした。

ところが不思議なことにニュートンが海水をくみ出している時に、その脳裏には「彼が子供の頃、母親から教えられた聖書の言葉がいくつか思い出されました。船は嵐を乗り、彼はその後、牧師になるために学び、ついには偉大な説教者となりました。

やがて高齢になったニュートンは、思考力も衰え、説教もやめなければならなくなりました。友人達が訪れると、彼はよくこう言っていました「すっかり年をとってしまった。思考力もなくなってきた。でも二つのことはよく覚えている。私が大変な罪人であったこと。そして、イエスが偉大な救い主であられるということです」。

Amazing grace how sweet the sound
That saved a wretch like me!
I once was lost but now am found
Was blind but now I see

私のようなろくでなしが救われた。かつて私は失われた者であったが、今は神によって見いだされている！私の目はかつて閉ざされていたが、今は見ることができる。

イエス・キリストは言われました「丈夫な人に医者はいらない。私が来たのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」（マタイ9章）

イエスは「丈夫な人に医者はいらない」と言われましたが、実際に神の目がこの世界に生きる人を余すところ眺めるならば「丈夫な人」はいないと聖書は語っています。イエスは「義人を招くためではなく」と言われましたが、実際に神の目がこの世界に生きる人を余すところ眺めるなら「義人」はいないと聖書は語っています。

かつてパウロは「キリスト教徒を撲滅する」という強い動機と共に殺害の息をはずませていたのです。ニュートンがアフリカに渡った動機は「思う存分罪を犯す」というものでありました。しかし、彼らはその虚しい動機から、人生をかけて足る動機を神の限りない寛容とあわれみゆえに手に入れたのです。

彼らはその生涯に全く同じことに気がついたのです。その生きた時代は1600年ほどの隔たりがあったのですが、彼らは「自分は神を必要とする病人であり、罪人である」ということに気がついたのです。そして、その「ろくでなし」である自分をイエスが無条件で赦し、受け入れてくれたことを知ったのです。

その時から彼らの人生の動機が変わりました。パウロはイエスを伝えるために異教の地に出て行き、奴隷船船長ニュートンは神の言葉を伝える説教者となりました。確かに主イエスの恵みは彼らを最後の最後まで突き動かしたのです。神の恵みにはそれだけの力があるからです。この神の恵みが私達に注がれているということを知る時に、私達もこの神の恵みに応答する者と変えられるのです。

義務で何かをしている時というのは、時間が経つが遅いものです。嫌な仕事をしている時には終業時間がくるのが何と遅い事か。しかし、やりがいがあることなら、あっという間に終業時間がやってくる。苦労も苦労と感じない。もっと働いていたのにと、後ろ髪をひかれながら帰宅することもあるかもしれない。

どうせ働くのなら、そんな仕事に就きたい。しかし、仕事は人生の一部にすぎませんが、その仕事も含めた人生そのものも、どうせ生きるのなら、いくつもの苦労をしながらも、喜びと感謝とやりがいに突き動かされて生きたいと思いませんか。そう、そのために必要なことは万民に与えられている神の無尽蔵の恵みに気がつき、その恵みと共に生きることです。この動機はオリンピック選手のように四年毎に更新しなければならぬものではなく、私達が天に帰るその時まで私達を突き動かすものなのです。

最後に神の恵みに支配され、それに突き動かされた生涯を全うしたパウロが心から溢れてくる思いを綴った言葉を私達の心になぞらえて、このメッセージを終わらしましょう。エペソ2章1節－10節を読んで終わらしましょう。

1 さてあなたがたは、先には自分の罪過と罪とによって死んでいた者であって、2 かつてはそれらの中で、この世のならわしに従い、空中の権をもつ君、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って、歩いていたのである。3 また、わたしたちもみな、かつては彼らの中にいて、肉の欲に従って日を過ごし、肉とその思いとの欲するままを行い、ほかの人々と同じく、生れながらの怒りの子であった。4 しかるに、あわれみに富む神は、わたしたちを愛して下さったその大きな愛をもって、5 罪過によって死んでいたわたしたちを、キリストと共に生かし——あなたがたの救われたのは、恵みによるのである——6 キリスト・イエスにあって、共によみがえらせ、共に天上で座につかせて下さったのである。7 それは、キリスト・イエスにあってわたしたちに賜った慈愛による神の恵みの絶大な富を、きたるべき世々に示すためであった。8 あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である。9 決して行いによるのではない。それは、だれも誇ることがないためなのである。10 わたしたちは神の作品であって、良い行いをするように、キリスト・イエスにあって造られたのである。神は、わたしたちが、良い行いをして日を過ごすようにと、あらかじめ備えて下さったのである。

パウロが特別なわけではありません。私達は神の作品であり、その作品を通して、神の栄光をあらわすことができるような人生に私達は招かれています。この言葉は「こうあらねばならない」と私達に語りかけるものではなくて、「こうありたい」と私達を突き動かす言葉なのです。そうです、主イエス・キリストが私達になしてくださった理由は、私達がこの思いにいたるためであったのです。お祈りしましょう。